

『讃美歌』および『讃美歌第二編』の不詳曲

櫻井雅人

1. はじめに

日本の賛美歌⁽¹⁾は外国（特にアメリカ、またイギリス）から多くが導入されているが、いまだに原曲がよくわからないものがかなりある。採用された際に出典情報がないうままに、あるいは不十分なしは誤ったままに、歌い継がれてきたためである⁽²⁾。歌詞のような言葉の手掛かりがないために、旋律の「身元」確認作業にはもとより難しさが伴う。また、曲名等の情報が付されていても、アメリカやイギリスの主だった賛美歌集に見当たらない場合もある。1954年の『讃美歌』と1972年の『讃美歌第二編』（および、それらの解説書である『讃美歌略解（前編・後編）』、『讃美歌第二編略解』）⁽³⁾でも多くの「不詳曲」が残っている。

『讃美歌』と『讃美歌第二編』は出版されてから年月を経ているので、その間に英米でも研究が進み、新しい賛美歌集および解説書が刊行され、賛美歌曲名（旋律）辞典も編纂されている。また、インターネットなども利用できるようになって入手可能な情報・資料も増えてきた。もちろん出典の可能性のあるすべての賛美歌集に目をとおして調査することが理想であるが、とりあえずある程度の調べがついた曲についてのささやかな報告を以下にまとめてみた。ただし、『讃美歌 21』および『讃美歌 21 略解』⁽⁴⁾において出典等が修正・訂正されたものは除いた。『讃美歌第二編』の167番「われをもすくいし」(Amazing Grace)、140番「ながき道ひとりあるきて」(Juanita)、158番「めさめよ、わがたま」(Ayrshire)の曲もすでに他所⁽⁵⁾で論じたので割愛する。なお、紙幅の制約により楽譜は提示しなかった。

2. 『讃美歌』の収録曲

199番「わが君イエスよ」

『讃美歌』で歌詞の出典は“Shinsen Sambika, 1890”と記されているが、それ以前の

1885年(明治15)の『讃美歌并(ならびに)楽譜』⁽⁶⁾で110番「たうときわが主よ」(曲名 Orio, 作曲者名なし)として紹介されたもので、1890年の『新撰讃美歌』(譜付)223番「貴きわが主よ」(曲名 Orio, 作曲者名なし)に、さらに明治版『讃美歌』(1903)137番「たふときわが主よ」(および178番「エスよみもとに」と402番「きよきところを」の曲; 曲名 Oriola; “Arr. from William Bachelder [*sic*] Bradbury (1816-68)”との注記あり)に引き継がれた。第1連はフレデリック・ホイットフィールド(Frederick Whitfield, 1829-1904)の“I need Thee, precious Jesus”の歌詞を元にしたもので、第2連は意識、第3連は創作とされる⁽⁷⁾。英米で“I need Thee, precious Jesus”の歌詞には Savoy Chapel, Aurelia, St. Anselm, Llangloffan, Ellacombe, Prysgol, Missionary Hymn, Passion Chorale, Meirionydd などの曲が配されてきたが、Oriola との組み合わせは日本独自と思われる。1954年版『讃美歌』および『讃美歌21』67番「貴きイエスよ」とは異なり、1931年版『讃美歌』までは「スコッチ・スナップ」風のリズムが使われていた。『讃美歌21 略解』では「ブラッドベリーの曲からの編曲とされていますが、原曲や編曲の過程については不明」と書かれている。

キャサリン・ディールの賛美歌曲目索引およびマッカチャンの『賛美歌曲名解説』⁽⁸⁾にはないが、ワッソンの賛美歌曲目索引(432点の賛美歌集の索引)⁽⁹⁾には Oriola の項目がある。冒頭旋律(incipit)は「ミファソラソドレドララ, ドソラソミレ」であり、『讃美歌』版の「ソラソドレドララ, ソラソミレ」と異なっているが似ている。ここで出典とされた1872年発行の『サンクチュアリー歌集』⁽¹⁰⁾を参照すると、旋律はワッソンの索引のとおりで、「スコッチ・スナップ」も使われている。日本版では冒頭の弱拍の短い2音を削除するなど、数箇所旋律を変更している(これが「編曲(Arr. from ...)」の意味であろう)。ただ、出版の1872年はブラッドベリー(没年は1868年が正しい)の死後であるので、『サンクチュアリー歌集』の初版(1865)あるいはブラッドベリー編纂の賛美歌集のいずれかに掲載されたと推測されるが、この点は確認していない(また、関連は不明であるがブラッドベリーには Oriola (1859) という日曜学校賛美歌集もある)。『サンクチュアリー歌集』の歌詞は“I need Thee, precious Jesus”ではなくて“Dear Saviour, ever at my side”(Faber); “Remember thy Creator now”(Anon.); “Dear Jesus, let thy pitying eye”(Anon.)の3編が配されている。

270番「信仰こそ旅路を」

『讃美歌略解』では「古くからスイスに伝っている民謡であり、……、英国の Con-

gregational Praise, 1951において、はじめて採り入れられたものである」との解説がある。しかし、この曲が英語の賛美歌になったのはそれよりも100年以上も前のことである。ワッソンの賛美歌曲目索引では、CANAAN, THE STAFF OF FAITH, TOGETHER LET US SWEETLY LIVEの3曲名がCANAANのところにもまとめられて、初出は1820年頃で“English trad. melody”と“Swiss trad. melody”の2説があると記されている。この記述は『古今アメリカ賛美歌集』⁽¹¹⁾の“Come, Happy Children”に付された注を参考しているようである。それによると、「曲はイングランド起源」であり、「1820年ころニューイングランドでリヴァイヴァル礼拝を行っていたイングランド人のマフィット師 (Rev. John N. Maffitt) によって初めて [アメリカに] 紹介された。イングランドのバプティストの *Sunday School Hymnary* では“English traditional”とされているが、後の *Fellowship Hymns* などでは“Swiss traditional”と呼ばれ、「1958年のピルグリム賛美歌集」でもスイス起源とされた、との説明が与えられている。『讃美歌 21 略解』(458番)は「スイス民謡といわれ」、「詳細は不明」という。

以上のように記述がまちまちなのは原曲が特定できなかつたからと思われるが、曲はクルーゼンの『ドイツ民謡集』に“Glück auf, ihr Bergleut”として収録されていて、注では“T. und M.: trad. 18. Jhdt.”とある⁽¹²⁾。この歌は多くのウェブサイトにもあり、CD (たとえば *Arzgebirg, Wie Bist du Schie—Geschwister Caldarelli*) も出ている。炭鉱夫の歌 (Bergmannslied) ともされる。たいていは単に「ドイツ (語) の民謡」であり、ザルツブルクの音楽のCD (“*Das klinget so herrlich*”: *Mozart und die Salzburger Volksmusik* および *Glück auf, ihr Bergleut: Volksmusik aus dem Tennengau*) にも含まれているので、「スイス民謡」というよりはドイツ語圏で広く歌われている歌と思われる⁽¹³⁾。ワッソンの索引における収録賛美歌集は3点のみであるが、日本では人気があり『インマヌエル讃美歌』498、『新生讃美歌』123、『讃美歌 21』458、『新聖歌』275にも含まれている。

330番「あめなるわが家を あおぎ見れば」

歌詞はワッツの“When I can read my title clear”で、彼の *Hymns and Spiritual Songs* (1707) で発表された。アメリカではPISGAHの曲などと組み合わせられてきたが、歌われることはあまり多くない。

「あめなるわが家を」は、小山・山田・デビソン編『譜附・基督教聖歌集 (改正増補)』(1884) 203番および明治版『讃美歌』(1903) 312番 (別曲) において HARP と

いう曲名で収録された。当初よりアメリカのジェンクス (Stephen Jenks, 1772-1856) の作曲とされているが、『讃美歌略解』が「作曲の経緯については不詳である」というところをみると、原曲は知られていないようである。ワッソンの賛美歌曲目索引によると、アメリカでは HARP ではなくて COMMUNION (または RESIGNATION) という曲名で5点の賛美歌集に収録されて、*The Brethren's Tune and Hymn Book* (1872) が初出であるという (1872年以前の賛美歌集は挙げられていない)。同じ年に出版されたジョーゼフ・ヒルマン編『ザ・リヴァイヴァリスト』⁽¹⁴⁾ はワッソンの調査対象外の賛美歌集であるが、この歌集に LOVING LAMB という曲名 (“In evil long I took delight” の歌詞) で載っており、変ロ長調で、一箇所フェルマータが付いている以外は編曲も HARP とほぼ同じであるので、これが HARP の出典かもしれない。

なお、この曲は “Amazing Grace” (『讃美歌第二編』167番) の「原曲」としてときたま題名だけが引き合いに出される “Loving Lamb(s)” であると思われる。しかし、いずれも5音階で旋律も似ているが、“Amazing Grace” の原曲である可能性はないだろう⁽¹⁵⁾。

402番「主のしもべの むつまじさは」

曲は『讃美歌并楽譜』(1882) で「とめるかみに」および「主によりてぞ」(曲名 KENTUCKY) として収録された。「主によりてぞ」は『新撰讃美歌』(譜付き, 1889) 236番に引き継がれた。デビソン編『基督教聖歌集』(1884) では112番「かみをあがめ」、『譜附・基督教聖歌集』(1895) では178番「かみをあがめ」が、『基督教讃美歌』(1896) では203番「わがつとめは」と246番「たまよまもれ」が Kentucky の曲である。明治版『讃美歌』においては、「主のしもべの むつまじさは」に Kentucky or Dennis, 「かみによりて いくしめる」に Holyrood or Kentucky とそれぞれ2曲が指定されている。昭和6年版『讃美歌』の「主のしもべの むつまじさは」で曲は Kentucky のみとなった。

作曲者ジェレマイア・インガルズ (Jeremiah Ingalls, 1764-1828) が、DELAY として『クリスチャン・ハーモニー』(*The Christian Harmony*, 1805) にチャールズ・ウェスリーの “Ah! whither shall I go” の歌詞で収録した⁽¹⁶⁾。チェイピン (Aaron Chapin) が編曲をしたという関連曲の NINETY-THIRD PSALM (あるいは単に NINETY-THIRD) のほうはシェイプ・ノート歌集の『ケンタッキー・ハーモニー』⁽¹⁷⁾ に始まり、『サザン・ハーモニー』(1835) を経て、『セイクレッド・ハーブ』(歌

詞は Philip Doddridge の “Grace! ’tis a charming sound”) に含まれているので、いまだに歌われている⁽¹⁸⁾。インガルズは “Garden Hymn” (「真白き富士の根」の原曲) の作曲者でもある。賛美歌サイトの The Cyber Hymnal (<http://www.cyberhymnal.org/>) で Kentucky は曲名リストに載っているが, “Kentucky: Not currently used” とされて賛美歌例は挙げられていない。しかし, 1866 年のフィリップス編『シンギング・ビルグリム』, 1872 年のハットフィールド編『教会賛美歌集』, 同年のヒルマン編『ザ・リヴァイヴァリスト』, ロビンソン編『サンクチュアリー歌集』, 1899 年の『南部メソジスト・エписコパル教会賛美歌集』⁽¹⁹⁾ などには載っているので当時はある程度知られていた曲であろう。

506 番「たえなる愛かな」

明治版『讃美歌』438 番においてウィットル (D. D. Whittle) の作詞, マググラナハン (James McGranahan) の作曲した “For God so loved! O wondrous thought” (歌詞初行) として紹介され, 昭和 6 年版『讃美歌』505 番を経て『讃美歌』に伝えられた。作詞者・作曲者・歌詞初行の情報がありながら日本の賛美歌集で英語の歌詞初行 (正しくは ‘For God so loved!’ Oh, wondrous theme) が訂正されなかったことから推測すると, 原典を参照することなく明治版をそのまま引き継いできたものと思われる。ワッソンの索引に For God So Loved (1884) (別名 Glory to God the Father) として載っているが, 掲載賛美歌集は 1894 年のサンキー他編『ゴスペル賛美歌集総集編』⁽²⁰⁾ (ここでの作曲者名 El. Nathan はウィットルの筆名) ただ 1 点のみで, 現在のアメリカではまったく知られていない。なお, 『ゴスペル賛美歌集総集編』よりも前に 1892 年の『ゴスペル賛美歌集第 5・6 集』⁽²¹⁾ に収録されている。サミュエル・ローガルの『ゴスペル賛美歌集総集編』解説書⁽²²⁾ には, 曲名がリストに載っているだけで作曲の経緯などについての記述はない。

507 番「ふかきみむねを」

『讃美歌略解』によると「作詞者不明の福音唱歌」であって, 「『基督教聖歌集』1895 に初めて掲げられ, その後, 明治版, 昭和 6 年版を経て, 現行版にうけつがれた」とされる。『讃美歌』の作詞欄にも “Kirisutokyō Seikashū, 1895” とある。しかし, 確かに 1895 年に改正増補された『基督教聖歌集』(譜附, デビソン編) に 380 番としてこの曲が収録されているが, 歌詞は「みちゆくともよ うまではげめ」(曲名 SWEET REST IN HEAVEN; 作曲者名 Wm. B. Bradbury; 原歌詞初行 Come, brethren,

don't grow weary) であって、「ふかきみむねを」ではない。曲は1884年の『譜附・基督教聖歌集』202番に載っている。現行の「ふかきみむねを」は、曲のほうを『基督教聖歌集』から引き継いだものであって、歌詞は明治版『讚美歌』209番から由来する。明治版には“Lord, so deep is Thy purpose”という英語歌詞初行があるが、索引には日本人の作であることを示す丸印が付けられている（つまり、「ふかきみむねを」は訳詞ではないという意）。

作曲者はブラッドベリーとされてきたものの、「今日、米国の代表的な讚美歌集には全然見当たらない」（『讚美歌略解』）といわれて、この原曲は不明で、ブラッドベリー作曲も確認されていなかった。ワッソンの賛美歌曲名索引を参照すると、SWEET REST IN HEAVEN (1902) という曲があるが、これは異なる旋律であり、「ふかきみむねを」の曲には BE NOT AFRAID (作曲者 William Batchelder Bradbury) の曲名が対応する。ただし、折り返し部分を先に示しており、旋律に若干の相違がある。挙げられている出典は *Temple Star* (出版年代なし；1877年か)⁽²³⁾ および *Hemlands-sånger* (1882) の2点である。曲はこれらよりも前にブラッドベリー自身が1862年に編集・出版した日曜学校用賛美歌集⁽²⁴⁾に SWEET REST IN HEAVEN として掲載されている。旋律は同じ（作曲者名 Wm. B. Bradbury）であるが、歌詞1番は“Come schoolmates, don't grow weary, /But let us journey on, /The moments will not tarry, /This life will soon be gone.” であって、明治版『讚美歌』の“brethren”と異同がある（日曜学校のための書き換えであろう）。この歌集では多くの歌に作詞者名がないが、ブラッドベリーの作詞かもしれない。さらに、1866年のフィリップス編『シンギング・ピルグリム』⁽²⁵⁾にも SWEET REST があり、こちらは“Come, brethren, don't grow weary” の歌詞である。

537 番「わが主のみまえに」

歌詞は『新撰讚美歌』で237番「キリストのまへに」として収録されたが、そこでの曲は BARNBY であり、TOWNER ではない。明治版『讚美歌』で454番「わが主のみまへに」として TOWNER と組み合わせられた。そこには“In one fraternal bond of love” との英語初行があるが、歌詞は日本人の作とされる丸印が付けられている⁽²⁶⁾。

原曲はロビンズ (Gurdon Robins) 作詞・タウナー (D. B. Towner) 作曲の“The Better Land”で、タウナーが編集した1901年出版の『信仰と賛美の歌集』⁽²⁷⁾に収められている。天国を歌ったもの (“There is a land mine eye hath seen/In visions of enraptured tho't”) で、日本語歌詞とは内容がまったく違う。楽譜の下に“Copy-

right, 1897, by D. B. Towner”と書かれているので初出は他の歌集であるかもしれない。ワッソンの賛美歌曲目索引に載っていないので、アメリカでは知られていない曲と思われる。

3. 『讃美歌第二編』の収録曲

第二編 184 番「神はひとり子を」

この賛美歌は、作詞が三谷種吉、曲は作曲者不詳（曲名：God's Love）とされてきた。『讃美歌第二編』よりも後に出版された『救世軍歌集』（1997）や『新聖歌』（2001）でも、作曲者はAnonymous（作者不詳）である。三谷種吉の『基督教福音唱歌』（1901）に13番「神は愛なり」として載ったもので、『リバイバル唱歌』（1909）47番など⁽²⁸⁾を経て『讃美歌第二編』に収録された。『讃美歌第二編略解』は、「三谷の作曲かもしれない」という憶測を紹介しつつ、「当時の米国の福音唱歌集からとられたものであろう」と推測する。

ワッソンの賛美歌曲目索引によると、1893年にロバート・ラウリー（Robert S. Lowry, 1826-1899）が作曲した。しかし、この索引に記載のある収録賛美歌集はスウェーデンとノルウェーの賛美歌集がそれぞれ1点のみで、英米の賛美歌集が挙げられていない。曲名も“Brist ut, min själ”であって英語曲名が示されていない。スウェーデンの賛美歌集⁽²⁹⁾に“Brist ut, min själ”として楽譜とともに収録されていて、作曲者はR. Lowryと書かれている。いくつかのインターネット・サイトによると、“Brist ut, min själ, i lovsångs ljud”の原詩作詞者はファニー・クロスビー（Fanny Crosby）であるが、英語の原題・原詩はわからない。『基督教福音唱歌』では9拍子であったが、スウェーデン版は『讃美歌第二編』と同じく6拍子である。なお、ワッソンの索引にGod's Loveという曲名の賛美歌がいくつかあるが、いずれも「神はひとり子を」の曲ではない。

第二編 185 番「カルバリ山の」

『讃美歌第二編略解』では、「中田羽後編『リヴィヴル聖歌』（1909）に作詞者作曲者不明として収録」され、「曲のスタイルからみて、アメリカの福音唱歌であろうと思われるが、今のところ正確な起源は不明である」と書かれている。しかし、『リバイバル唱歌』（1909）には含まれていない（書名に注意）。戦前版（1937）と戦後版（1955）の『リヴィヴル聖歌』⁽³⁰⁾にはある。『新聖歌』（2001）や『新生讃美歌』（2003）では作

詞者・作曲者ともに不明 (anonymous) であるが、『救世軍歌集』(1997) および『希望の讃美歌』(セブンスデー・アドベンチスト教団, 2006) ではグレアムの作詞で、カークパトリックの作曲と「伝えられる」(Attr. William J. Kirkpatrick) とされる。ワッソンの索引では作曲者は不明で、カークパトリックの「編曲」である。

救世軍歌集の解説書⁽³¹⁾によると、この歌詞はサラ・グレアム (Sarah Graham, 1854 頃-1889 頃) により書かれたもので、救世軍の *The Musical Salvationist* (July, 1886) に作詞者名を付けずに発表され、1899 年の歌集に収録された。サラ・グレアムはカナダのオンタリオ州の「救世軍人 (soldier of the corps)」で、若い頃から詩作にいそしんでいたが、婚約者が肺結核で急逝したショックから立直れないまま、35 歳の生涯を終えた。

カークパトリック (W. J. Kirkpatrick, 1838-1921) とスウィーニー (J. R. Sweney, 1837-99) が音楽担当編者 (musical editors) である『古今福音聖歌集 (*Hymns of the Gospel New and Old*)』(no. 54, 出版年代不明)⁽³²⁾ に “On the Cross of Calvary!” が収録されていて、作曲者欄には “E. E. N. (Melody arr. for this Work)” と書かれている (ここでは作詞者を “S. C. B.” としている)。E. E. N. とはおそらく救世軍大尉で *Highway Songs* (救世軍歌集) の編者であった E [dward] E. Nickerson と推定される (この賛美歌集の「謝辞」に名前が載っている)。カークパトリック自身は、自分の作品とは言っていないので、「編曲者」と考えるのが妥当であろう。救世軍のバンド旋律集⁽³³⁾にも載っているが、この旋律集に作曲者等は記載されていない。なお、『リヴイブル聖歌』版と『讃美歌第二編』版の楽譜は 3/4 拍子 (一部 4/4 拍子) であるが、上記の英米版の楽譜は全編を通して 4/4 拍子で音符の長さに相違がある。救世軍以外の英米の代表的な賛美歌集には含まれていないと思われる。

第二編 187 番「聖徒よ、よろこびもて」

楽譜の右上に示されているように、曲の出典はシェイプ・ノート歌集である 1844 年出版の『セイクレッド・ハーブ』とされてきた。しかし、確かにこの歌集には “All Is Well” (J. T. White 曲; 歌詞は “What’s this that steals upon my frame?”) が収録されているが、この版はむしろ別の曲としたほうがよいくらいの大きな違いのある旋律で、これが直接の出典とは考えられない⁽³⁴⁾。

『讃美歌第二編』版はモルモンの賛美歌集⁽³⁵⁾にある旋律と同じで、そこでは作詞者はウィリアム・クレイトン (William Clayton, 1814-79), 曲の出典は (『セイクレッド・ハーブ』ではなく) “English folk song” (具体的な曲名はなし) とされている。

クレイトンは、すでにいくつかの歌集に取り入れられていた曲（たとえば1841年のブラッドベリーとサンダーズの『ヤング・クワイア』⁽³⁶⁾；曲名は同じく“All Is Well”で歌詞は“What’s this that steals upon my frame?”）を利用して1846年に新しい歌詞（“Come, come, ye saints”）を書き⁽³⁷⁾、1851年に出版した（歌の終わりに繰り返される“All Is Well”という語句は共通している）。『セイクレッド・ハーブ』版はこれらの先行曲を改作したもので、『讃美歌第二編』版とは親子関係ではなくて、従兄弟関係にあると思われる。イーノス・ダウリング賛美歌コレクション⁽³⁸⁾に“All Is Well”を収録した7点の賛美歌集があり、いずれも『セイクレッド・ハーブ』よりは後に出版されているが、これらも『セイクレッド・ハーブ』から由来していないと思われる。つまり、『セイクレッド・ハーブ』版はむしろユニークな編曲である。曲の系譜はさらにイギリスの“Begone Dull Care”⁽³⁹⁾という世俗曲に遡ることができる（かなりの違いがあるが、旋律の一部が似ている）。モルモンの賛美歌集がいう“English folk song”とはこれを指しているようである（ただし、「民謡」というよりは「大衆歌謡」であるが）。

4. おわりに

以上のごとく、いくつかの曲については、まだ不明瞭な部分が残っているものの、系譜がはっきりしてきた。主な曲目（旋律）索引は活用したつもりであるが、載っていない曲もある。索引に載っていても曲名や冒頭旋律・歌詞初行に違いがあったりすると、探し出すことが難しくなることもわかった。原曲が確定されたら、次は直接の出典の探求である。候補に言及したものもあるが、多くはわからない。旋律や編曲の類似、曲名・歌詞初行などを手掛かりにして賛美歌集同士を比較する作業が必要であろう。たとえば、『サンクチュアリー歌集』と『讃美歌并楽譜』とは曲目のみならず編曲も共通しているものが多いことが挙げられる。

1820年までの賛美歌曲についてはテンパリーの詳細な索引⁽⁴⁰⁾があるが、19世紀中期・後期以降の楽譜付き賛美歌集は数が多いので、これらをすべてカヴァーする索引ともなるとはたして編纂可能なものかどうかともわからない。ワッソンの索引は利用しうる最も詳しい索引であるが、19世紀から20世紀初頭の福音唱歌・日曜学校賛美歌などは手薄である。いずれにせよ、現在利用できる索引等を駆使して、また出典の可能性のある賛美歌集を1ページずつ見ていくことが、原始的な方法ではあっても、最も確実であるように思える。なお、部分的には情報が得られても今回は報告できな

った曲がかなり残された。これらについては今後の課題としたい。

注

1. hymn の訳語には「賛美歌」と「讃美歌」の表記があり、教派によっては「聖歌」と呼んでいるが、書名・引用等を除いて原則として「賛美歌」に統一した（原恵・横坂康彦『新版・賛美歌——その歴史と背景』日本キリスト教団出版局，2004，p. 15 参照）。
2. 唱歌の場合も似たような状況にある。
3. 日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌』（日本基督教団出版部，1954），『讃美歌第二編』（日本基督教団出版局，1967），『讃美歌略解 前編（歌詞の部）・後編（曲の部）』（日本基督教団出版部，1954-55），『讃美歌第二編略解』（日本基督教団出版局，1974）。
4. 日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌 21』（日本基督教団出版局，1997），『讃美歌 21 略解』（日本基督教団出版局，1998）。
5. 「“アメイジング・グレイス”の起源と背景」（『一橋論叢』130 巻 3 号，2003），pp. 165-87；「“ニュー・ブリテン”から“アメイジング・グレイス”までの系譜」（『一橋論叢』135 巻 3 号，2006），pp. 365-85；「唱歌集の中の外国曲——『小学唱歌集』を中心として（2）」（『言語文化』42 巻，一橋大学語学研究室，2005），p. 7；『『小学唱歌集』のスコットランド曲』（*CALEDONIA*，33 号，日本カレドニア学会，2006），p. 4。
6. 楽譜では 9 小節目最後のソプラノの「ミ」音が抜けている（神戸女学院大学覆刻「讃美歌并楽譜」研究会編『讃美歌并楽譜（覆刻版・付解説）』新教出版社，1991）。なお，本稿で言及したほとんどの明治期の賛美歌集は，手代木俊一監修『明治期讃美歌・聖歌集成（全 35 巻・別巻 1）』（大空社，1996-98）および国立国会図書館近代デジタルライブラリー（<http://kindai.ndl.go.jp/>）所蔵版を参照した。他の日本の賛美歌集についても，特に必要のない限り書誌情報を省略した。
7. 神戸女学院大学「新撰讃美歌」研究会編『新撰讃美歌資料集』（神戸女学院大学，1993），pp. 370-71；同会編『「新撰讃美歌」研究』（新教出版社，1999），p. 103。
8. Katharine Smith Diehl, *Hymns and Tunes: An Index* (New York/London: The Scarecrow Press, 1996); Robert Guy McCutchan, *Hymn Tune Names: Their Sources and Significance* (New York/Nashville: Abingdon Press, 1957).
9. D. De Witt Wasson, comp., *Hymntune Index and Related Hymn Materials*, 3 vols. (Lanham, Maryland: The Scarecrow Press, 1998).
10. Charles S. Robinson, ed., *Songs for the Sanctuary: or, Hymns and Tunes for Christian Worship*, new edition (New York etc.: A.S. Barnes & Company, 1872), p. 321 [nos. 1036-38]. 作曲者名は楽譜にはなく，巻末の曲名索引（p. 463）に付されている。
11. Albert Christ-Janer et al., eds., *American Hymns Old and New* (New York: Columbia University Press, 1980), vol. 1, p. 413. 曲名は CANAAN, 歌詞は “Come, happy children, let us sing” で旋律に多少の違いがある。注は vol. 2 (pp. 36-37) にある。この賛美歌集は歴史的資料であって，礼拝用ではない。
12. Ernst Klusen, *Deutsche Lieder, Zweiter Band* (Frankfurt: INSEL, 1981), pp. 471 and

840.

13. これらのCDはインターネットで一部を「試聴」した。
14. Joseph Hillman, *The Revivalist* (Troy, NY: Joseph Hillman, 1872), no. 322. ここに出典等の情報はない。George Pullen Jackson. *Another Sheaf of White Spirituals* (1952; New York and Philadelphia: FOLKLORICA, 1981, p. 70) に *Revivalist* 第1版 (1868) からの楽譜 (主旋律のみ) が転載されている (no. 322 という番号も同じ)。
15. 藤森美究も「HARPとAMAZING GRACEの前半では旋律が類似しており、前半18音中13音が同じである」という (『日本の賛美歌・聖歌曲旋律INDEX (旋律事典) 第1巻』燦葉出版社, 2004, p. 82)。この類似を初めて指摘したのはおそらく Robert Guy McCutchan, *Our Hymnody: A Manual of The Methodist Hymnal* (New York/Nashville: Abingdon-Cokesbury Press, 1937, no. 209 [p. 256]) で, “It [“Amazing Grace”] may be a variant of an old tune called ‘Loving Lamb.’” と書かれている。しかし, Raymond F. Glover, ed., *The Hymnal 1982 Companion* (New York: Church Hymnal Corporation, 1990) などの然るべき解説書で, “Loving Lamb(s)” 原曲説は完全に無視されている。
16. Marion J. Hatchett, *A Companion to The New Harp of Columbia* (Knoxville: University of Tennessee Press, 2003), p. 180.
17. A. Davisson, ed., *Kentucky Harmony* (1816; rpt. Minneapolis: Augsburg Publishing House, 1976), p. 39 [原著 p. 19].
18. *The Southern Harmony & Musical Companion* ([1835], 1854; rpt. University Press of Kentucky, 1987), p. 7 [出典 Baptist Harmony, p. 121]; *The Sacred Harp* ([1844], enlarged ed., 1860.; rpt. Nashville: Broadman Press, 1968), p. 31 [*Southern Harmony* 版と同一]。現行の *The Sacred Harp (1991 Edition)* (Sacred Harp Publishing Company, 1991, p. 31); *The B.F. White Sacred Harp (Revised Cooper Edition)* (Samson, Alabama: Sacred Harp Book Co., 2000, p. 31) にもある。*The Sacred Harp* (1860 ed.) は Sunday School Books Shaping the Values of Youth in Nineteenth-Century America (American Memory, Library of Congress) (<http://memory.loc.gov/ammem/award99/miemhtml/svyhome.html>) でも参照できる。アクセスは2006年6月末日現在である (以降のウェブサイトも同じ)。Voices Across America (<http://www.pilgrimproduction.net/index.html>) という民間の歌唱を集めた宗教音楽サイトに3点の録音が収録されている (ただし, Lucius Chapin 編曲とされているものもある)。
19. Philip Phillips, *The Singing Pilgrim, or Pilgrim's Progress Illustrated in Song for the Sabbath School, Church & Family* (New York: Carlton & Porter/Cincinnati: Philip Phillips & Co., 1866), no. 129 [楽譜は冒頭4小節のみ; 曲名は KENTUCKY]; Edwin F. Hatfield, ed., *The Church Hymn Book* (New York/Chicago: Ivison, Blakeman, Taylor & Company, 1872), p. 334 [曲名は KENTUCKY (IOWA)]; Hillman, *The Revivalist*, no. 212 [曲名は KENTUCKY]; Robinson, *Songs for the Sanctuary*, p. 146 [曲名は KENTUCKY]; *Hymn and Tune Book of The Methodist Episcopal Church, South* (Nashville: Publishing House of The Methodist Episcopal Church, South, 1899), no. 794 [曲名は GAVIN].
20. Ira D. Sankey, James McGranahan and Geo. C. Stebbins, *Gospel Hymns Nos. 1 to 6*

- Complete* (Chicago: Biglow & Main, 1894), no. 329 [曲名は GLORY TO GOD THE FATHER]. 日本でもジョージ・ブレスウエイト編 *Gospel Hymns Consolidated* (Tokyo: The Japan Book & Tract Society (基督教書類会社), [1903], 1909, no. 485 [歌詞のみ]) に英語歌詞が取められた。
21. *Gospel Hymns Nos. 5 and 6 Combined* (Chicago: Biglow & Main, 1892), no. 63.
22. Samuel J. Rogal, comp., *Sing Glory and Hallelujah!: Historical and Biographical Guide to Gospel Hymns Nos. 1 to 6 Complete* (Westport, Connecticut: Greenwood, 1996), p. 142.
23. アメリカ議会図書館のオンライン・カタログでは, “Kiefer, Aldine S., ed. *The temple star*. Ruebush, Kiefer & co., Singer’s Glen, Va., 1877.”
24. Wm. B. Bradbury, *Bradbury’s Golden Shower of S.S. Melodies: A New Collection of Hymns and Tunes for the Sabbath School* (New York: Ivison, Phinney & Co., 1862), p. 102 [Sunday School Books Shaping the Values of Youth in Nineteenth-Century America (American Memory, Library of Congress)]. この賛美歌集はワッソンの索引に含まれていない。
25. Phillips, *The Singing Pilgrim*, no. 138 [楽譜は冒頭の 3 小節のみ; 作詞者名・作曲者名なし].
26. 「奥野昌綱の作であろう」(『新撰讚美歌資料集』p. 393) という。なお, 韓国の賛美歌集『찬송가』(1989) にも 278 番「사랑하는 주님 앞에」(曲名 TOWNER, 作詞者 J. Montgomery, 英語歌詞初行 In one fraternal bond of love) として収録されているが, 曲は日本版に由来すると思われる。
27. D.B. Towner, *Hymns of Faith and Praise: A Collection of New and Standard Hymns for Sunday Schools, Young Peoples’ [sic] Societies, Gospel and Social Meetings* (Dayton, Ohio: Lorenz Publishing Co., 1901), no. 34. これもワッソンの索引に含まれていない。
28. 中田重治・坂井勝次郎編『リバイバル唱歌』(聖書学院, 1909, p. 48; 「神は愛なり」, 曲名 God Is Love, 作曲者名なし)。中田羽後編『リバイブル聖歌』(日本聖歌協会, 1955) でも 250 番「神は愛なり」(作曲者 Unknown) である。韓国の『찬송가』416 番「하나님은 위아들을」は三谷版である(作詞者は T. Mitani, 作曲者は Anonymous, 曲名は GOD’S LOVE)。
29. *Svenska Missionsförbundets sångbok* (Stockholm: Svenska Tryckeribolaget Ekman & Co., 1903), no. 424 [Project Runeberg, <http://runeberg.org/smfsang/>].
30. 中田羽後編『リバイブル聖歌』(ホーリネス教会出版部, 1937, no. 159 [歌詞のみ, 曲名なし]); 『リバイブル聖歌』(1955, no. 159), 作曲者は Unknown。
31. Gordon Avery, comp., *Companion to The Song Book of The Salvation Army* (London: Salvationist Publishing and Supplies, 1961), p. 33. 歌詞は *The Song Book of The Salvation Army* (Verona, N.J.: The Salvation Army National Headquarters, 1987, no. 128) にある。
32. この *Hymns of the Gospel New and Old* は, ワッソンの索引のみならずアメリカ議会図書館のオンライン・カタログにも載っていない。手元の刊本は標題紙が欠落しているの

- で、表紙に示された音楽担当編者名以外の書誌情報が不明であるが、ブリティッシュ・ライブラリーのオンライン・カタログにある *Hymns of the Gospel, New and Old, Compiled by F. D. Sandford* (London: Marshall Brothers, [1890]) であろう。
33. *The Band Tune Book of The Salvation Army* (London: Salvationist Publishing and Supplies, 1987), no. 326.
34. *The Sacred Harp* (1860 ed.; rpt., 1968), p. 122. 『サザン・ハーモニー』(p. 306) を引き継いだものである。『セイクレッド・ハーブ』版の録音は *Blest Be The Tie That Binds—Minnesota Cooper Book Convention, Feb. 2000—St. Paul, MN* (© Toni Mitchell, 2000) [CD] にある。
35. *Hymns of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints* (Salt Lake City: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1985), nos. 30 and 326 (men's choir). モルモン版と『セイクレッド・ハーブ』版の楽譜は Stephen A. Marini, *Sacred Song in America: Religion, Music, and Public Culture* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2003, pp. 358-60) にも転載されている。
36. William B. Bradbury and Charles W. Sanders, *The Young Choir, Adapted to the Use of Juvenile Singing Schools, Sabbath Schools, Primary Classes, &c.* (New York: Dayton and Saxton, 1841), pp. 84-85.
37. Paul E. Dahl 論文 (“‘All Is Well...’: The Story of ‘the Hymn That Went around the World,’” *BYU Studies* 21, no. 4 (1981): 515-527; Education, Arts, and Scholarship Music LDSFAQ, <http://ldsfaq.byu.edu/view.asp?q=483> の要旨を参照した) によると、クレイトンは1846年4月に「古いイングランドの曲 (old English tune)」に触発 (influenced) されて “All Is Well” と題する歌を「作り (composed)」, 1851年までにはモルモンの讃美歌集に収録されたとされる。新たに「作曲した」とは言い難いので “composed” は紛らわしい表現である。
38. Hymnals of the Stone-Campbell Movement: Enos E. Dowling Hymnal Collection (<http://www.lccs.edu/library/hymnals/>).
39. William Chappell, *Popular Music of the Olden Time*, vol. 2 (London: Cramer, Beale, & Chappell, n.d. [1859]), pp. 689-90. この曲は山田源一郎編『中等教育唱歌集』(2版) ([初版1907], 共益商社, 1908, 楽譜ページ pp. 31-32) [近代デジタルライブラリー] に「夏は逝く! (十七世紀英国の曲)」として採用されたことがある。
40. Nicholas Temperley, *The Hymn Tune Index: A Census of English-Language Hymn Tunes in Printed Sources from 1535 to 1820*, 4 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1998).